市場の理論モデルにおいて、供給の変化とその効果（影響）とはどのようなものか

（経済学概論２）

供給曲線は財の供給量に影響を与える様々な要因のうち、財の価格のみで他の要因を一定にしたものである。しかし、価格以外の要因（与件）が変化する場合は、供給曲線は平行移動することになる。

財の供給は主に企業組織で行うが、工業製品と農産物では財の性格に大きな違いがあり、与件の変化が著しい農産物について説明する。農産物の供給面での主な与件としては次のものがある。①労働者の賃金、地代、借入利子などの生産要素の価格。②生産技術。③天候の状態。「生産要素の価格」は財の生産費の主要部分であるが生産費を縮小する変化は、財の価格がそのままであっても、利潤が増加するので、供給量が増加する。「生産技術」は農業面においては作物の品種改良や化学肥料の向上により高い収穫を得ることができ、供給量が増加する。「天候」の要因も、冷夏や猛暑などにより大きく関係してくる。天候は経済外的な要因であるが、供給曲線を大幅にシフトさせる要因となる。

財そのものの価格が変わらなくても与件の変化により、その財の供給量が増加したり減少したりする。「供給の増加」とは与件の変化によって財の供給が増加することである。「供給の減少」とは、逆に財の供給が減少することである。

図１において、供給の増加は、供給曲線$S_0 - S_0$が$S_1 - S_1$にシフトすることでP_0の価格のもとで供給量がQ_0であったのもがQ_1に増加することである。供給の減少は、$S_0 - S_0$が$S_2 - S_2$にシフトすることで価格がP_0のもとで供給量がQ_2に減少することである。

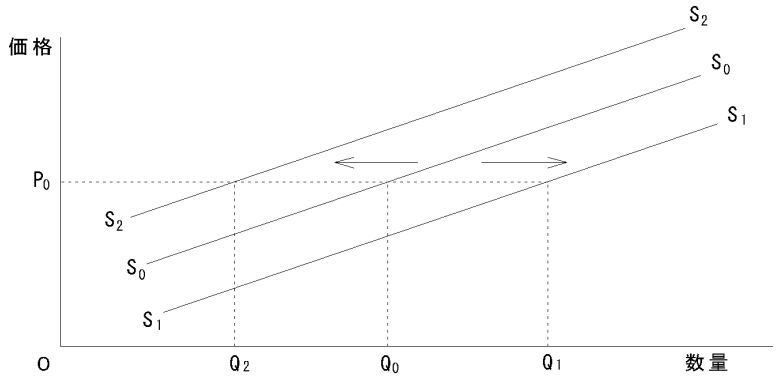

図１．供給曲線のシフト

この供給曲線のシフトは「供給の変化」といい、この変化により安定していた市場が影響を受け価格や生産量に変化が現れることである。需要に変化がなく、与件の変化により供給曲線が変化したとき、均衡価格と取引量がどのように変化するかを図２で表す。

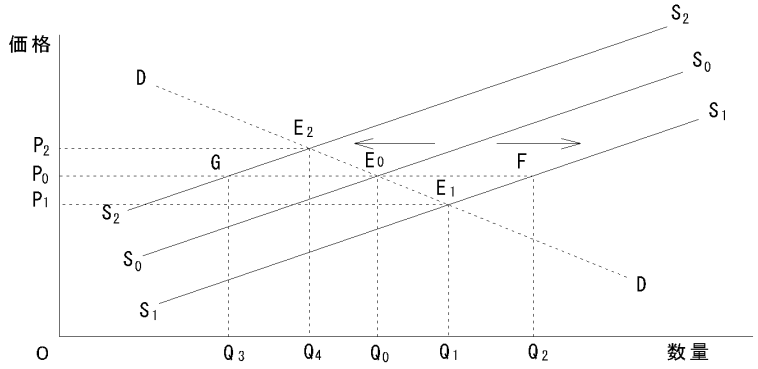

図２．供給の変化と均衡の変化

当初の供給曲線を$S_0 - S_0$、需要曲線を D-D とし、均衡点はE_0で、均衡価格はP_0、均衡取引量はQ_0とする。需要曲線 D-D はそのままで供給曲線$S_0 - S_0$が供給の変化（増加）により$S_1 - S_1$にシフトすると、価格P_0で供給量がQ_0であったものがQ_2に増加する。従ってE_0 −F だけ超過供給が生じる。市場経済システムのもとでは、新しい均衡値E_1に調整され、価格はP_0からP_1に低下し、取引量はQ_0からQ_1に増加することになる。供給の減少の場合もその逆で、需要曲線 D-D はそのままで供給曲線$S_0 - S_0$が供給の減少により$S_2 - S_2$にシフトすると、価格P_0で供給量がQ_0であったものがQ_3に減少する。従ってE_0 −G だけ超過需要が生じる。市場経済システムのもとで、新しい均衡値E_2に調整され、価格はP_0からP_2に上昇し、取引量はQ_0からQ_4に減少することになる。

以上のように様々な与件の変化により、収穫量（生産量）に変化が生じ、それに伴い需要が一定であれば、財の価格が変動する。

供給の変化に対する効果（影響）をまとめると以下のようになる。与件の変化により生産の変化が生じ、価格に影響を与える。①生産要素（賃金、地代、利子）の変化は上昇する傾向にあり、供給量に変化はなく、価格は上昇する傾向にある。②生産技術（品種改良、肥料の改良、機械化等）の変化は、供給量を増加させる方向にあり、価格が下がる傾向にある。③自然環境の変化は、農産物においては異常気象でない限り、生産量は増大し、価格は下がるが、異常気象などが起きた場合は収穫量が急落し、需要は変わらないため価格は急上昇する。このように農産物については豊作であっても、凶作であっても生産者にとっては最悪の条件となる。